

晩年の金子直吉翁と栄町時代の 太陽産業の事業

横田周作

私が金子直吉翁に接したのは翁が逝去された昭和十九年の前二年余りの間であります。当時、私は学校を戦争の為繰上卒業して年齢二十四才の新入社員でありましたので、直接金子さんからお話を頂く事は殆ど無く、廊下でお顔を拝見するのが関の山でありました。その私が金子さんの事について何か書いて見ようと思うのは如何にも鳥滯がましい事ではありますが、今では当時金子さんの直下で活躍して居られた方が殆ど亡くなられ、一方昭和二年鈴木商店倒産頃までの事を記述した記録は多く見られますが、晩年の金子さんの活動を書かれた物は殆ど見られませんので、私なりに「私の見た晩年の金子さん」の事を書いて見たいと思います。勿論群盲象を語るの愚は承知して居りますが、どうかお許し願います。

私が太陽産業に入社したのは、昭和十七年一月で会計資金関係を担当されて居られた橋本隆正氏の下に配属になりました。当時太陽産業は鈴木岩次郎氏が会長、鈴木岩蔵氏が社長で鈴木商店の後身そのもので、金子さんは太陽産業に拠って鈴木商店の事業の再興を画って居られたのです。

鈴木商店の商業貿易部門は既に高畑誠一氏・永井幸太郎氏をはじめ多くの人材により日商株式会社設立され、既に相当な規模で商

権を回復され、世界中に支店網を有する貿易商社として活動して居られました。

太陽産業は当時、直営事業としては小規模の鉱山事業を営んで居りましたが主体は持株会社として傘下の各社を統括するコンツェルンの中心でありました。

太陽産業は元の太陽曹達を社名変更したものでありますが、既に曹達灰の商売は行って居ませんでした。当時の太陽産業の役員は前述の通り会長鈴木岩次郎・社長鈴木岩蔵・常務取締役谷治之助・取締役高畑誠一・同永井幸太郎・同小川実三郎の諸氏で監査役は金子文蔵氏・柳田義一氏でありました。金子さんは何の役職にもついて居られませんでした。が、実質的に経営にあたって居られました。

当時太陽産業の本社は栄町通り三丁目にあり、古めかしい木造二階建ての建物で所有者が西田仲右衛門さんでありました。一階の南側は鈴木薄荷の本社が使用し、楠瀬正一氏の外岡田猪太郎氏・中村勇吉氏が居られました。一階の北側は電話交換室、食堂等がありました。二階の南側には経理庶務用度等の入った大部屋があり、橋本隆正氏・松本三平氏・岡清一氏が主任格で建部清四郎氏や小生の外、後に太陽鉱工で活躍された松下重男氏や山本幸男氏も居られ、両氏は勤務の傍ら勉学に通って居られる青年でありました。大部屋の西側にはタイプ室があり、永い勤務歴を誇る古出よね女史ともう一人若いタイピストが居られました。大部屋の東側には東神興業の本社があり平高寅太郎氏・越智望氏・竹内武氏等同社幹部が詰めて居られ、大部屋のすぐ北側には樺太ツンドラ工業の本社の小さな部屋があり笹記為三郎氏と外に二人の社員が居られたと記憶します。そ

の東側には廊下を挟んで、鉱山部の部屋があり、そこは直営の鉱山を統括する部門で、主任格の小樋井正夫氏のほか橋本知一郎氏や山添和雄氏もその部屋に居られたように記憶しています。鉱山部には各鉱山の現場責任者や技術者が報告や連絡の為に出入りして、何時も賑やかでありました。

二階の北側には東西に二つの部屋があり、東側は重役室で会長、社長のお机もあり、平常は常務の谷治之助氏が詰めて居られ、竹村房吉氏もその部屋に居られたと思います。役員会が行われる時はその部屋が使われ、盆暮れの賞与の時は我々社員はその部屋に呼び出され、会長社長と云うより御主人から直接頂戴致しました。その西側の部屋が金子さんの部屋で、金子さんと秘書格の安東直市氏がその部屋に居られました。前述の松下氏も必要に応じてその部屋の用に任じて居られました。

金子さんは毎日定刻に自動車で出勤され、階段を昇る時は身の回りのお世話を担当して居た諏訪竹市氏と運転手の松下宝造氏が両脇を支えるようにして居られましたのを思いますと、少し足元が危なかったのではないかと存じます。いつも黒いダブダブの服を召され先の尖った帽子をかぶって居られました。

松下重男氏のお話によると「金子さんは大変寒がりで、五月、六月でも部屋には電気ストーブを点けられ、一方のぼせ性で頭には何時も氷嚢を載せて居られ、同室の安東氏も来客の方々も部屋の暑さには閉口され、汗をかきかき話をされて居た由です。尖った帽子の中には此の氷嚢があつた訳です。

此の部屋で金子さんは傘下各社の幹部や直営鉱山の責任者から報告を受け、色々指示を与え、又各方面への手紙を書かれて居られた

訳ですが、来客の中には正体不明の浪人風の人々も多くあり、今となつては私にはその一端を推測する事しか出来ませんが、アジア全体、特に中国を念頭に置いた金子さんの構想、夢が関係していたように思われます。

重要な文書はタイプライターに廻され、古出女史がタイプを行って居ましたが、私も時たまその原稿を拝見する機会がありました。宛名には当時の大蔵大臣で金利・金融政策に関するもの、海軍軍令部長宛のものには印度方面東アフリカ方面の資源関係に関するものであつた様に覚えて居ります。

当時の金利は定期預金が三・三％で短期借入金や手形の割引率は四・二％位でありましたので今から考えてもそう高い訳でもなかったと思いますが、金子さんはそれでも不満で、『米国と競争する為には更に一％は引下げるべきである』と主張して居られました。

午後二時頃になりますと安東さんは来客を断り金子さんを自動車に有馬におつれて静養する様にして居られましたと存じます。

然し聞いた処では、金子さんは夜は遅くまで御自宅で書類を閲られたり、読書を読まれたり、書簡を書かれたりされ睡眠時間は非常に短かつた由であります。たまに昼食後には元町の美術骨董品屋をひやかされる事も楽しんで居られた様ですが、何と言っても事業そのものが楽しみであつたのではないでしょう。

当時傘下には数多くの企業があり、その多くは旧鈴木商店の整理の間に債権者の同意を得て、第二会社的存在である太陽産業へ引取ったものでありますが、一部太陽産業時代に新しく起業創立した事業もありました。ただ帝国人絹や豊年製油などは完全に他の手に渡り、その後公開された企業となつて、太陽産業はその一株も所有

して居りませんでした。又神戸製鋼所・日商・大日本塩業などの大株主ではありましたが、既に上場され公開された会社であり、太陽産業からすれば巨大な企業に成長して、人材も豊富であり、金子さんの指示で動くというものではなかったのですが、高畑、永井の両氏は太陽産業の役員でもあり又神戸製鋼所の社長田宮嘉右衛門氏も元の金子さんの部下でもありましたので、それぞれ独自の判断で金子さんに協力して居られた様に思われます。

古い創立の会社でその当時傘下にありましたのは日沙商会、日本輪業、東洋ファイバー、日本樟脳、鈴木薄荷、東神興業、伊豫陶器、帝国樟脳、日本冶金等であり、これ等は全株又は支配力のある株数を保有して居りました。

新しく創立せられた会社は、樺太ツンドラ工業、羽幌炭鉱鉄道、大川目鉱業等で、他に青木の稀有金属研究所、鷲津の再生絹糸研究所などがありました。

当時金子さんが特に力を注いで居られたのは羽幌炭鉱鉄道と大川目鉱業で、羽幌は元満鉄撫順炭鉱に居られた岡新六氏をスカウトして社長とされ、神戸製鋼所から最も信頼出来る人材としてスカウトした町田穀光氏を現地支配人に、鈴木商店時代から温存して来られた北海道天塩地区の炭鉱を開発、昭和十五年から国鉄と山元を結ぶ鉄道の建設に着手、突貫作業で昭和十六年には十六キロ余の鉄道の敷設を終え、太陽産業が直営で開発に着手していた炭鉱を吸収し、社名も羽幌鉄道から羽幌炭鉱鉄道と改めたところでした。

此は私の推測ですが、金子さんは三井財閥の経済的基盤を作ったのは三井三池炭鉱であり、住友財閥の基盤を築いたのは別子銅山であつたと云う事を念頭に置かれ、新生鈴木を此の炭鉱に期待

られたのではないかと存ぜられます。何と云いまでも明治大正を通じて勝戦と日本の勢力拡張の時代に生きた方であります。金子さんは占領下の南方の資源に着眼し直ちに新しい構想を作つて居られた様に思われます。

特に軍がボルネオ北岸（旧英保護領サラワク）に上陸する時には、同地に永年事業（ゴム林経営）を行つて来た日沙商会の大関雄只氏等が、軍と同行現地王室との連絡役になる等の事があり、現地の英国国策会社ボルネオカンパニーの事業を日沙商会が継承し、社名もボルネオ産業と改称し、新たに銅鉱山等の開発を行うに至りました。

当時日沙商会の社長は西川玉之助氏で専務に近藤正太郎氏・役員には藤田広馬氏・大関雄只氏・蔵原惟門氏等が居られ、日沙商会改めボルネオ産業は俄然忙しくなり、色々現地に送る人員資材の調達輸送、資金関係等問題多く、近藤・藤田両氏は始終金子さんの所に報告に参つて居られました。又当時の日沙商会には、後に太陽鉱工にて戦後活躍された西川栄一氏・松井伊佐雄氏が在勤され、西川氏は現地にて終戦を迎え、色々苦勞された由です。

又日本輪業は日沙商会のゴム部門が分離して出来た会社で、当初主に自転車用タイヤとチューブを製造し、高圧ホース製造技術の開発、自動車用ブレーキホースの国産化に成功し、其のほか工業用のエポナイト製品の製造を行つておりました。昭和十四年頃から軍の要請で航空機用の各種高圧ゴムホース製造に着手。此が戦争の激化に伴い、陸海軍の軍需工場として神戸岩屋の本社工場の外、姫路・大阪等に工場を持ち大発展をいたしました。昭和十八年増資して社名を日輪ゴム工業と改めました。当時の役員は社長野村敬氏・専務

されたのではなからうかと思つて居ります。

間違つて居るかも知れませんが、後に私が此の羽幌炭鉱鉄道の経営に派遣された時には少なくとも私は金子さんの遺志をそのように解して働かして頂いた積りであります。

昭和四十五年エネルギー革命の流れの中に此の炭鉱を閉山せねばならなくなつた時、私の心の中には金子さんの志を無にせねばならなかつた痛みが大きかつた訳です。

大川目鉱業は当時我が国に産出せず専ら米国から輸入して居た特殊鋼原料のモリブデンを国産化する為に、岩手県の大川目地区と島根県の大東地区に発見された鉱床を開発精練するのが目的で大川目・大東共に現地に精鉱設備を造り、硫化モリブデン精鉱として、赤穂に精練工場を置き、三酸化モリブデン・フェロモリブデンを製造、軍需生産が緊急の当時の鉄鋼業界に供給する構想でありました。

此の羽幌炭鉱にしても、大川目鉱業にしても開発には巨額の資金が必要であり又多くの人材を集結する必要があり、金子さんの御苦労もその点にありました。此等の仕事の大部分は東京支店を中心に遂行されて居た様で、金子さんは月中半分位は東京ステーションホテルに駐在され、金子三三郎氏・松井元氏・田代義雄氏・鈴木正氏・富樫狷介氏などの側近を駆使して各方面に手を打つて居られたように存ぜられます。昭和二年の倒産の件が無ければ、自ら第一線に出て活躍されたであらうと思いますが、表面的には後方にあつて実際の活動は此等の方々が出て居られた様に思われます。

当時は太平洋戦争が勃発したばかりで、日本軍は南方各所に進撃し、陸海空共に勝利に次ぐ勝利で真に景氣の良い話ばかりで、私たちもそうでありましたが、金子さんも此の南方の大戦果に酔つて居

米田幸吉氏・常務田中眞一氏・取締役外浦・佐橋・北原・藤田各氏と云う面々であつたと思います。

増資のため資金調達と払込業務等に私もかわりまして、経理課長をしておられた富永昌孝氏とは度々相談をした覚えがあります。野村・米田両氏は度々金子さんの所へ報告に来訪されてよく顔を拝見しました。

稀有金属研究所は、米国留学から帰られた柳田彦次氏が主采して居られ、モナズ砂鉱を原料としてジルコニウムやトリウム、セリウム等の分離精製の研究を行つて居られ、後に現在の新日本金属化学に発展したものです。

此等多くの事業にそれぞれ人材を配置し、資金その他の面の支援を行い、成長を見守つていくのが晩年の金子直吉翁のお仕事でもあり、又そう云つては失礼かも知れませんが、楽しみでもあつたのではないかと存じます。

此等の事業の外に新たに金子さんが情熱を傾けて居られたのはアルミニウムの製造事業でありました。将来航空機や日用品に亘りアルミの需要が増加して行くとの見通しを持たれ、原料のボーキサイトはインドネシア方面から、電力は水力発電による事とされ、屋久島が降雨量が多く急流であるのに着眼され、そこに発電所を造り、築港を行い、工場も屋久島に建設する計画で色々調査を進めて居られました。膨大な資金の必要な事業でありましたので、太陽産業独力ではとても不可能として、日商・神戸製鋼所・大日本塩業・太陽産業の合同で会社を設立する事とし、その準備にかかつて居られました。然し戦争の資材資金の統制下では何年先に完成するか判らぬ事業への投資は困難で、その時点では不可能であつたと思います。

唯その当時、金子さんの書かれたものには、ボルネオ島占領に伴いサラワツクのレジャン河が非常に水量が多く急流であるとして、屋久島案を変更して北ボルネオサラワツク（現在の東マレーシア）に水力発電所とアルミ精練工場を建設すべきであると云う文章を拝見した事もありますので、金子さんも此の事業が実現できるとはお考えにならなかったかもしれません。此の計画は金子さんのご逝去と敗戦により遂に陽の目を見るに至りませんでした。

現在その当時の金子直吉翁の年齢に到達してみても、はじめてあれだけの事業への情熱を持ち続けると云う事がどういう事か感ぜられる訳です。

あの様に寒がられ、又氷嚢を常時頭に置かれ、鼻の通りも悪くて時々スポイトで鼻に薬を吹き込まれ、足も多少弱って居られたのを考えると、健康状態も相当悪かったと思われませんが、それにも拘らず最後まで事業への強い情熱を燃やして居られた晩年の金子翁に対し驚きと尊敬を更めて感じる次第です。

勿論、人により価値観には差異があり、人間の評価もそれぞれに異なるものですが私がその後接した金子さんの下で働かれた方々の殆どは、とても素晴らしい方々でそれぞれに違った特徴を持たれながら夫々に、事業への情熱を燃やし続けられて居ました。中でも若輩でありました頃の私に叱咤と指導を賜った橋本隆正氏・近藤正太郎氏・町田穀光氏などのお言葉とその処身の中に金子翁の精神の流れを伝えて頂いた様に感じて居ります。

昭和十九年の春、戦勢は難しくなっており居りましたが、まだ空襲もなく破壊と敗戦を見られる事なくこの世を去られた金子翁の晩年の二年間余りを同じ場所でも過ごした思い出を書かして頂いて懐かしく

ばさみを首に掛け、金剛杖をつきました。

その装束姿で、鳴門海峡に近い第一番札所霊山寺から、八十八ヶ所霊場と、同じ数の弘法大師寺、そして番外寺数ヶ所の、合計二百程をぜんぶ参拝したのです。その間は、どこへも電話もかけず、新聞も読まず、テレビも見ずに過ごしました。大丈夫と自信をもつて出かけたとはいえ、振りかえってみると、我れながら良く一つ残らず廻って来られたと思います。たとえば、六十番横峰寺は、急な傾斜道が千三百メートルもある難所で、もめん三反をつなぎ合わせた一本のロープに全員がすがり、『弘法大師様、ありがとございます』と合唱しながら、三、四ヶ所休み、必死でようやく登り終えました。そのあと数百段もある階段もある階段を登り、本尊様を拝むまで、大変な苦勞でした。四十五番の岩屋寺もなかなか難しい場所でした。出かける前に知っていた札所は二十七番神峯寺でした。

元奈良市長の鍵田忠三郎さんは三十八歳の時、肺ガンのため余命二ヶ月という死の宣告を受け、その時、四国順拝を決意したのです。が、二十七番の神峯寺で仮死状態に陥ったそうで、『般若心経は電気の理法』という本の中に鍵田さんは次のように書いています。

「『大死一番』という禅語ですが、それを知ったことは般若心経の意味を知る上で大変役に立つ有り難いことでした。『一遍死んで来いと。千尋の谷の崖の上でぶらさがっているのが人間の姿であり、その手を離してみよ』そうしたら確実に死ぬであろう、死んで蘇る者だけが初めて本当の世界が判るし、大死一番悟りが得られるということです」仮死状態のなかで、「犯すことのできない生命の決め事に従う」という悟りを得て蘇生された鍵田さんは、二十八番札所より般若心経を唱え、八十八ヶ所全部の順拝を終えたのです。

存ずる次第です。

（本稿はあくまでも筆者の私見であり色々間違っている点や書きもらした点が数々あるかと存じますがご容赦下さる様お願い申し上げます。）

90歳のお遍路さん

函館 加地 彦太郎

去る四月六日から二十一日までの十六日間、かねてより願っていた、四国八十八ヶ所霊場参りをしてきました。計画は昨年夏に立てたのですが、じつは二十五年程前に、妻と一緒に行くべく相談がまとまっていながら、仕事が忙しくて果たせなく、その時は高野山宝亀院にて二泊三日、朝晩のお勤めをして戻ってきました。そして今日まで、気にながらも相変わらずの多忙のため、実行できずにいたのです。

ようやく九十歳になつて霊場順拝を終えた今、今回の旅の思い出を、いくつか述べてみようとおもいます。一台のバスに同乗した、四十名の第六次巡礼の同行者は全国から集まった人々です、北海道からは、函館の私と小島敬子さん（この方は十二回目の霊場参りだそうです）の二人だけでした。私は健康には自信がありますが、それでも出発まではベストの体調を維持すべく気を配り、留守のあいだの仕事を整えたり、様々な準備をしました。

巡礼の装束は事前に取り寄せた、白いもめんの衣と白いズボン、当地で揃えたあじろ笠をかぶり、背中には三衣（さんえ）の袋、札

それから三十四年、欠かすことなく、一日百巻以上、心経読誦を行っているそうです。

ふだん私は、仕事と関連のある書や美術品の本に加えて、仏教についても色々な書物を読んでおりすが、とくべつ信仰を持っているというのではありません。ただ日頃、人のためになることは公私共に私の許される限りの協力をして今日まで過ごしてきました。

この度は、ご一緒した方々から、「九十歳の加地さん、頑張つて」という、熱いご協力、応援があったればこそ、全部の順拝ができたという感謝の気持ちと、さらに宗教心がある方の特別な精神の在り方を学ばせてもらい、これからの私の人生の指針にも励みにもしたいと思いました。

帰宅後、巡礼姿のまま、九十歳という年齢で八十八ヶ所を全部、無事に廻ってお参りした事を、亡き妻、加地家、笠井家の先祖に報告しました。お遍路とは何かと難しいことはさておいて、仏間を出るとき、人生と商売の良き伴侶であった妻が生きていた時に、何を思い出しても一緒に廻るべきであったという感慨が湧いてきました。そして、昨夏造作した陶陶亭開華門前に立ち、祈念撮影をしてもらい、久しぶりに我が家での昼食を攝ったのですが、急に眠気を催し夕刻五時まで眠ってしまいました。その後も二、三日間、ただただひたすら眠っておりました。

この度の四国巡礼で二kg程減った体重は、なかなか回復しませんでした。が、歩く速さはありがたいことに五年くらい若くなったようです。

陶陶亭商事

美術サロン 盧山代表